ジャンボサイズ・マジックガール

これは現実のような夢の世界の物語。アストルムという名の世界に存在するアストライア大陸、その最大国家にして城壁都市ランドソルに運命によって引き寄せられた四人の少年少女がいた。蒼のロングヘアをなびかせ凛と戦う上流階級出身にして魔族の剣士レイ、猫の獣人である身を活かし俊敏な動きと連撃を生み出すパンチで敵を翻弄する天真爛漫な少女ヒヨリ、後衛で二人の背中を守る心優しき魔法士の人間ユイ。そしてランドソルにそびえ立つ巨塔・ソルの塔の頂上を目指す彼女たち、ギルド『トゥインクルウィッシュ』と時に行動を共にしユイの想い人である騎士がユウキである。そんな彼女たちは今日も…。

「行くぞヒヨリ、私たちで道を作る！ユイは援護を頼む！」
「おっけいレイさん！準備運動もばっちり、ジャンジャンやるよ～！」
おどろおどろしいダンジョンの中を突き進む剣士と黄色の髪と尾を揺らしながら格闘する獣人。両者の動きは絶妙に混ざり合い、闘志に導かれた魔物たちとの戦場を圧倒していた。空を切る剣の音、破壊力を思わせる打撃音、その勢いが収まる頃には足場は消滅していく魔物たちの残骸で満たされ、少女たちの呼吸音が反響する。鼻で吸い口から吐く、心拍数の高まりを落ち着かせている間に桃色の魔法士が魔法陣を展開するのがソルの塔・低下層における彼女たちの常だ。
「ありがとう、ユイ。私はもう大丈夫だが君たちは怪我してないか？」
「大丈夫。今の戦闘、今までで一番速く終わったんじゃないかな？皆また強くなったんだね」
「えへへ…ユイちゃんに褒められると嬉しいな～！優しくて褒め上手だからきっとあたし達も強くなれたんだよ」
その雰囲気は至って良好。HPゲージで言えば満タンといった所まで回復した三人の少女たちは上の階層を目指す…のだが、歩みだしたユイが振り返る。その視線の先には地べたに座り込み砂利遊びをする騎士の姿があった。

「騎士クン、上の階に進もうか！きっと何か思い出して元に戻るヒントが見つかるかも、私が騎士クンを守ってあげるから…ね？」
頬を赤らめた少女は座り込む少年に手を伸ばす。一瞬キョトンとしたものの彼の表情はまるで次のおもちゃを見つけた子供のように好奇心に溢れた。なぜ騎士である彼がこのような振る舞いをするのかというと、その経緯は長いのだが要するに摩訶不思議な現象によって彼の精神は幼児退行してしまったと言ったところ。そんな騎士ユウキを少女たちがソルの塔に連れてきたのはまさに何度も挑んだダンジョンに再び挑むことで精神異常の回復となるトリガーを求めていたからであった。

§§§

登ること三時間。汗こそ額に浮かべるもののパーティの状態は異常なし。次に挑む階層も少女たちにとっては攻略の容易い領域であった。舞うような動きで魔物を切りつけるレイはその勢いに曇りを見せない。彼女の性格上、戦闘狂とまではいかずとも熱くなりやすく冷めにくいというのもあり、撃破していく魔物の数は依然増え続けている。一方のヒヨリは一人奔走するレイの背中を守るような戦い方にシフトしつつもこちらも弱いとはいえ数が勝る魔物の軍勢に囲まれていた。
「レイさん、ちょっと急ぎすぎてるよ！はぁ…！うりゃ！…このままじゃ分断されちゃう！」
「はっ…！すまないヒヨリ！また急ぎ過ぎてしまったか、今戻る！そこを動かずに…んぐっ！？」
戦場に絶対はなし。今まで確実に踏破してきた地であろうともその成功率は確実なものではなく時に失敗もある、それがまさにこの時だった。背と背を向かい合わせた戦闘スタイルがいつの間にか若干の距離を開き、足元には魔物の体液と自身らの汗が溜まっていた。そんな中で態勢を整えようと焦ったのなら転ぶ可能性は幾分少なくはない。案の定レイ

は脚を挫いたかのような流れでその場に倒れ込み、迫り来る魔物たちに距離を詰められる。そんなレイに気を取られていたヒヨリもまた全方向からの敵に間合いを詰められ対処に難航する。先陣を切って戦う二人以外の戦力が回復魔法を主とする魔法士ユイと幼児退行してしまった騎士ではこの状況を打開する手段はそう見つからずピンチ此処にあり。

「レイちゃん、ヒヨリちゃん！どうしよう、回復魔法を使おうにもまだ近いヒヨリちゃんならともかく、距離の離れたレイちゃんには届きそうにない…。近づこうにも魔物が迫って…うぅ…きゃ！私じゃ力に…ううん、弱気になっちゃだめ！騎士クンを守れるのは私だけ、私だけだから！」

心を蝕まれそうになったユイは自身の背後に寄り添う少年の姿を視界に入れ自我を保つ。かつて騎士に守られていた自分の姿を想起しながら魔法の杖を強く握る。滴る汗、徐々にペースを上げていく心臓の呼吸に対抗するかのように表情を強張らせ魔物に対峙する。そうしていると彼女のスカートを軽く引っ張る存在に気付くのも遅れそうになっていた。

「…え、騎士クン！？何、をして…スカート！覗いちゃ…！」

こんな状況でも幼児となった想い人の奇行に動揺は隠せない。だがユイの決意に共鳴したのか少年の眼差しは次第に大人びた物へと変化していった。

「ユイ！このままじゃ、マズい！力を…使おう！」

一瞬にして周囲が光に包まれる。その中心に立つのは紛れもなく魔法士の少女であり、高まる力の源泉は彼に由来するものであった。彼女はこの力を憶えている。あの日あの場所で仲間の窮地を救った力。彼はこの力を憶えている。いつかどこかで大切な人を守った力。

「うん…！チェンジ・プリンセスフォーム！」

§§§

眩い光が少女を包み込む。暗く閉ざされた塔の内部で恐ろしい魔物たちの姿が照らし出される。その数は百を超え単身での攻防に勝機は薄いと誰もが思うほど。だが彼女には勝利を掴む力が与えられた。閃光は収まり内部からは白桃色のドレスに身を包んだユイの姿が浮かび上がった。

「…降り注げ、ディバインレイン！」

少女の一撃は無数の矢のように分裂し地に降り注ぐ。否、矢というよりかは大砲のような威力、槍のような鋭さを備えており数刻の攻撃で階下まで地を抉り貫通するのではないかと思わせる。だがその光線は味方を傷つけず魔物だけを消滅させる、これがプリンセスの力であった。

「や、やったよ！騎士クン！騎士クンのおかげで皆を、まもれ…」

体感にして数秒、その一瞬に現れた姿は消え元のユイの姿に戻る。だが体力に関しては莫大な消費を免れずその場によろめいた少女は膝から崩れ落ちた。駆け寄る仲間、ヒヨリは少女の名を叫び、レイは冷静を取り戻そうと努めるが気を失った様子のユイに不安が隠せない。一方でユイの背後に座り込んでいた騎士ユウキは再び幼児の精神へと逆行していた。

「ユイちゃん！起きてよ、ユイちゃん！どうしようレイさん…今までプリンセスフォームになっても気を失う事なんてなかったのに」

§§§

気絶したユイの腕を肩に回しヒヨリとレイは彼女を運ぶ。その行先は塔の上層部ではなく下へ下へ。目を離せば迷子になりかねないユウキを気にかけながら歩む一行は日が暮れるころに漸くギルドへと帰還した。ユイが回復魔法の展開前に気を失ったことにより二人の前衛戦士は衣服の所々を破いた状態で乙女の柔肌を覗かせている。服が身代わりに

なったことで外傷自体は大したことない程度で済んだが問題は疲労にあった。それは騎士も変わらず四人は結果として各々の自室に帰る間もなく眠りについた。

時は流れ早朝。ランドソルの地に朝日が射しこみ、トゥインクルウィッシュのギルドハウスには生活音が僅かに響く。サクッとなるパンの音、外はカリカリだが恐らく中はフワフワと。液体が喉を通る独特の音色と共に微かにテーブルにマグカップの置かれる。そのリズムは常人のそれではなく幾分か速いもので食事の音以上に少女の吐息が大きく目立つものであった。

「はむっ…このぱん、いくらたべてもっ…んぐぅ、あきないし、もうすぐばたーも…なくなりそうなのにっ、もっとたべたくて…あむっんぐ、はぐ！…止まらないよぉぉ！」

共同生活スペースに倒れ込んだレイ・ヒヨリ・ユウキを差し置いて一人食に耽る桃色の少女。頬袋をパンパンに膨らませ、籠一杯に詰め込まれていたであろうパンの山はパンくずを周囲に残しながら少女の胃袋の中へと消えていた。無論、その豪華な食事音に目覚めない者がおらず、揃いも揃ってユイの食事が目覚ましとなった。

「ん…んん…ゆいちゃ…おはよお…って、良かった！ユイちゃん元気になったんだね！」

「ああ…一時はどうなる事かと心配したがその様子ならいつもと変わらず元気になりそうだな」

「ん、んぐぅ…おはよう、皆…！昨日は、ふぅ…心配かけてごめんね」

目覚めた一同は安堵の表情を顔に浮かべ食卓に向かう。ユイに関しては一旦手を止め昨日の記憶を思い出す。どうやら自身が気を失ったというのは自覚しているらしい。椅子に手を掛けたユイ以外の三人は籠に手を伸ばす。勿論朝食のパンを胃に収める為であり、ユウキに関しては冷蔵庫の戸を開けて出したミルクの準備まで万端であった。

「ああ…これは…」

「やっぱり…？」

ヒヨリとレイは互いに顔を合わせる。どうやら言いたいことは両者同じらしい。
「私はパンを買ってくる。ヒヨリは…」
「じゃあバター買ってくるよ！ユイちゃんは騎士くんと留守番お願い！」
「あ、ああ…ごめんね、つい食べ過ぎちゃって…」
ユイの謝罪に二人は笑顔で返す。この事態もこれまでに二度経験済みだからであろう。以前に変身した際は美食殿というギルドの少女と共に戦闘にあたりその後かなりの食費を使用。二回目はユウキと二人で戦闘訓練していた際に変身し、昼食用の弁当を平らげたがそれでも足りずギルドハウスに帰宅後一晩中食べ続けていたのだ。そんな事態を経験した来たギルドメンバーにとってユイの暴食にも若干の慣れが生じていたのだろう。扉の締まる音と共にギルドハウス内には騎士と魔法士が残されていた。
ぎゅるぎゅるぎゅるぎゅるぅぅぅ…！
「どうしよう…皆を困らせるくらい食べたのにまだお腹が空いて…そうだ！この前買いだめしたパンケーキの素がまだたくさん…あった！これなら大丈夫だよね！」
静寂の訪れた室内でユイはこっそり棚に仕舞っておいた袋を全て取り出す。その数は片手で数えるには多すぎる。そんな袋の中から開け放たれた粉からまるで錬金するかのようにしてフライパン上で作られたパンケーキを何重にも大皿に乗せ、たっぷりの蜂蜜と果物、終いには練乳を絞り出してはまるで「食料版ソルの塔」と言わんばかりにそびえ立つパンケーキの山を空腹を告げる音と共に貪り始めた。
「い、いただきまふ…んぐ、あふ…うう、んぐっふぅ…！とまらなひ！はむ！あむ！ふぅ…はぐっ！おいひいよぉ…！」

§§§

昼と呼ぶには些か早いが朝と呼ぶには遅い時間帯、獣人と魔族の少女はギルドハウスの扉を開く。手にはパンとバター、なんなら食欲の収まらない仲間の為に調達したハンバーガーやサンドイッチと言った軽食の類まで。これなら料理する手間も省けるため打って付けだと考えたからだと思わせる量。だが肝心の空腹に飢えた魔法士の姿は共同スペースにはない。残されたのは甘い香りの漂うキッチンにきちんと現れた大皿とフライパン。幼児の精神になった騎士に問うと少女の行き先は恐らく自室。となれば軽食の向かう先は当然…。

「ユイ、今回はだいぶ早く落ち着いたようだね。念のために買っておいたハンバーガー、扉の前に置いておくから、良かったら食べて」

「サンドイッチもあるよ！卵とね、なんとハムカツとチキンカツまで！また食べれる時に食べてね！ユイちゃん！」

§§§

ユイは焦っていた。どう考えても食べ過ぎている。天井に着かんとするまでの量のパンケーキを胃に与えてもなお食欲は収まっていない。それどころか更に飢えを感じてしまって額に汗を浮かべている。そんな彼女の目線の先はまるで妊婦のように膨れた腹部にあった。衣服を押しのけるように膨れた腹はその柔肌を外気に晒し叩けばポンとなりそうな曲線を描いていた。のにも関わらずだ、未だ収まらない食欲に身を任せ食べ物を頬張ろうものならそれこそ破裂しかねない。そう思ったユイはイチかバチか自身に回復魔法と作用させる。

「うぅ…ふぅ…だいぶ、楽になったかも…」

先程までの窮屈感から解放され徐々に腹部の余裕が戻ってくる。回復魔法にこんな用途があったとはと自身でも驚いている様子であるが、恐らく摂取したカロリーは消えておらず寧ろ消化を促進させたことで身体への吸収自体まで早くなっているかもしれない。だが彼女は止まることができなかった。太ることが目に見えていても食欲には勝てない。以

前の暴食時に「次また食欲に駆られたら」と想定し自室に隠していた菓子の類をベッドの下から箱ごと引きずり出す。箱の中身はポテトチップスやチョコレート、シュークリームなどが溢れかえっているが何故か空のプリンの容器まで入っている。

「食べないと…このままじゃまた、倒れちゃう…！」

徐に手を伸ばしポテトチップスの袋を今度は勢いよく開ける。だがその中身は先程のパンケーキに比べたら十分の一にも満たないほど。これで満足するはずもなくユイは口に流し込む以前に手を止めた。

「これじゃ、流石に…あ、確かこの前見つけた指南書に…」

空腹に耐えながら本棚を漁る。その中にはかなりの古書から傷一つない魔導書まで備わっており、ユイが手に取ったのは形状変化に関する魔術所、その中でも質量変化の頁を開く。この世には人をプリンに変える技まで存在するのだからそれくらいはあってもおかしくはない。

「あった…！これなら量を増やせるかも！」

少女は自慢の魔法の腕を奮い自室にある食料全てに魔法をかける。するとたちまち複製されたかのように箱ごと食料が倍加。魔法をかければ再び倍加。また倍加…。

「これなら大丈夫…！いただきまぁ…はむっ！んん…！やっぱり堪らないよ～！」

ブク…

「はふっ…はぁ…！まだまだ…！」

ブクブク…

少女は気づく。回復魔法をかけてすぐだというのに再び腹部に圧迫感があることに。故に再度回復魔法を使う。だがその瞬間、彼女の腹部を覆っていた衣服はボタンを弾けさせ文字通りの柔肌を晒す。張っているのではない。これは明らかに脂肪であるが彼女はその名を口にしない、できない。恐る恐る触れた塩の付いた手は指先から肉に埋もれ陥没してい

く。試しに凹ませようものならより贅肉らしさを醸し出すようなセルライトの跡まで浮かび弾力というより突きたての餅のような感触。そんなものは乙女にとって天敵であろう。だが時すでに遅し、食べたものは消化が促され瞬時に脂肪へと変換されていく。せり出していく腹に気を取られていたがどうやら太くなっているのは全身であり、腹肉を摘まんでいた指までもが肉に包まれ、二の腕は垂れ下がり尻が重いのか立っているのが辛くなるが空腹は収まらない。60kg、70kg、90kg、120kg…。

「はむっ…ふぅ、なんで、こんなに…！はむっ、あむ！ふとっちゃうのに、ふとっちゃうのにやめられないよぉぉぉ…！あむ、ふひゅ…はむ、ぜぇ…んぐぅ」

ぶよ…

むちむちむち…

ギチ、ギギギギギ…バチン！

ぶよん！だぽん！

§§§

あれから一週間はたったであろうある日。今日もユイは自室から出てこない。声を掛けても「大丈夫」の一点張りであり扉すら開かれていない。ただあの日購入してきたハンバーガーとサンドイッチだけはきちんと食べたのか、廊下に置かれてはいなかった。そしてこの日は少女が再び皆の前に姿を見せる日でもあった。

「ユイは本当に大丈夫なのだろうか…流石に一週間ともなると健康被害が心配なんだが」

「だよね、ユイちゃんのご飯が食べられないのも辛いし、何よりこのままじゃあたしたちのギルド、生活できなくなっちゃうよ～」

溜息交じりの心配の念を心に抱えた少女たちは食卓に着いて話し合っている。本当ならば部屋に押し入ってでも連れ出すのが正解なのかもしれないが、長く苦楽を共にしてきた、いや思っているよりもっと以前から一緒にいたような仲間だからこそ、こういった不測の事態に個人の空間に押し入ることができないのかもしれない。今までそういったことがなかったから。だがそれは一人の騎士を除いての話、今の彼は嘗ての彼ではなくまさに幼児なのだ。

「お、おい…！どこにいくんだ！？」

「騎士くん、待ってよ～！」

突然立ち上がり走り出した少年が向かったのは少女の部屋。固く閉ざされた扉を彼は叩く。文字通り叩く、腰にて身につけた剣で。

「んぐ…え、なになに！？ちょ、ちょっと待ってよ！うっぷ…私なら大丈夫だから！だから見ないで！」

扉の奥から籠ったユイの声が聞こえる。間違いない彼女の声であるが若干低くなっただろうか、それも一瞬の事で聞き間違いのようにも感じたがひたすらに剣を扉にぶつける手は止まらず、内側からカギが閉められているとはいえ木製のそれは容易く木片へと姿を変えていった。

「ユイ！」

少年の声がギルドハウスに響く。それと同時に少年の姿は閉ざされていた空間の中へ消えていった。それを間近で目にしていた少女たちも突入する。一週間ぶりだが何処か長く離れ離れになっていたような感覚、きっとこれが感動の再開…なんてことにはならず、目の前に広がる光景に皆が閉じた瞼を擦る。

§§§

そこに広がるのはお菓子やハンバーガーの包み紙、そして何とも甘いような香ばしいような不思議な香り。その中心

には大きなぬいぐるみのような肌色の物体、人の形…というには大きすぎなくもないような。だがそれは動いてみせた。
「ふ、ふぅ…皆、どうして…！騎士クンまで…！あ、ダメ！こんな身体、見せられないよ…！」
明らかにユイの声を発するそれはユイの身体であり、贅肉に覆われていることを一同は数分の空白を以て認知した。まさかこんなに太っていたとは。誰も口にしないが苦悶の表情を浮かべて互いに見つめ合う。特大クッションのように広がった腹肉がウエストサイズ200㎝以上ではないかと思わせるほど脂肪で覆われ僅かでも隠せると思ったのか、弛み切った二の腕から陥没した肘を経て五本のソーセージが伸びる手まで脂肪に食い込ませている。というのも元々の彼女の衣装は弾け飛んだのか胸部にしか残っておらず、下半身に関してはスカートを履いていないのは明確だが肝心のパンツだが肉に埋もれて所在の確認はできない。その肉は何も腹肉だけでなく太ももを始めとした下半身の肉も合わさっており体育座りは愚か、星座すら困難だと思わせるほどの肉量。極めつけは呼吸をするたびに揺れる垂れ下がった顔肉と二重顎である。それでも美少女の面影を存分に残しているのだから奇跡と言ってもいい。そんな彼女であったが周囲の反応はそこまで悲観的なものではなかった。
「え、ええ…騎士クン！？ちょ、なんでお腹揉むなんて、やめ、あぁ…！気持ちいいからダメだって…！やめ…んぐふぅ！？くちに、はんばーがー、いれないれ！んぐぅ…！」
駆け寄るようにして巨体のユイに近づいた少年は好奇心からかひたすらに少女の腹を揉み始める。まさに変幻自在、上下左右好きな方向へこねくり回せるそれは幼児にとっては粘土遊びのようなもの。そして彼の右手に握られたハンバーガーは彼女の口に押し込まれていた。
「騎士くん！？ユイちゃんに乗っかって何やってるの！？…でもなんか気持ちよさそう…ええい！あたしもお肉揉んでみたぁい！」
「ヒヨリまで…！全く…二人ともはしゃぎすぎだよ…ん、なんだ…とても気持ちいい感触…！これは堪らないな！」
三人の手に揉み解される全身の脂肪にまさかこんな展開が急に訪れるなど予想もしていなかったユイだが揉み解しの快

楽に思考はジャックされ既に自由の下にはなくなっていた。
「な、なんでそんなに揉むの〜！？んぐふ、おいひい…けど！たべたら、また…ふとっちゃう…あむっ」

§§§

ここはソルの塔。頂上を目指すギルド『トゥインクルウィッシュ』は今日も挑戦を欠かさない。
「ふぅ…ヒヨリ、すまないが背中は任せた…！」
「おっけい…！ここで頑張ればお昼の時間だからね…！」
ぎゅるるるる…！
蒼のロングヘアをなびかせ小ぶりな胸を他所にたっぷり蓄えられた腹肉を揺らし戦う上流階級出身にして魔族の剣士レイ、猫の獣人である身を活かしかつての倍ほどのヒップサイズによるプレスをを魔物にお見舞いすると同時に前方へは弛んだ二の腕から連撃を生み出すパンチで敵を翻弄する天真爛漫な少女ヒヨリ、そして…。
「ふぅ…はぁ…ふ、二人とも待って…！あまり急ぐと息切れして、大変だから…！ぜぇ…ひゅぅ…え、何かにぶつかった？…ああ、魔物潰しちゃったみたい…そんなに太ったかな…きっと昨日のケーキ、食べ過ぎたからだよね…ふひゅ…」
後衛で二人の背中を守る魔力タンクとも呼ぶべき物理的にも蓄えるものを存分に蓄えた心優しき魔法士の人間ユイ。
それぞれ体重は118kg、124kg、324kgと言ったところ。最近の日課となっている毎朝の体重測定で記録し互いに互いの素肌を晒しながらサイズ計測するほどなのだから間違いはないだろう。
「はぁ…流石に疲労が溜まったね…ヒヨリ、またパンチの威力上げたんじゃないか？なんというか重みが増して俊敏さこそ欠けるものの破壊力の凄まじさを感じるよ」
「はむっ！んぐぅ、ふぅ…レイさんも、お肉揺らして綺麗に戦うなんて凄いよ！昨日より倒した魔物も多いんじゃな

い！？」
「流石に身体の重さにも慣れるからね、でも今朝測ったら3kg増えてたのには驚きだよ、ところでユイはどう？」
「んぐっ…ええ、私！？そうだね…ちょっとまだ慣れないかも…狭い道は通れないしもうちょっとでお腹が床に着いちゃいそうで…」
「なぁんだ！それなら大丈夫！あたしたち皆通れないしユイちゃんのお肉気持ち良いし真っ直ぐ突き進も～！」
こうなったのには経緯がある。あの日太り切ったユイの姿を確認した一同は存分に肉を堪能。だがユイの肉体以上に一つ深刻な問題が生じていた。それは増え続ける食料である。何かのバグなのか、もしくはユイ自身が摂取カロリーの余剰分を脂肪とは別に魔力へと変換している為に魔法の効果が持続しているのか、部屋中に散乱した食料の中からハンバーガーやサンドイッチ、その他お菓子類は増え続けていたのである。勿論、捨てるという選択肢も考えはしたが心優しき少女たちにそんな選択肢は残るはずもなく、即座に消費を決意。といった流れで溢れかえった食料の消費生活が食に興味を示さなかったユウキを除いた三人で始まったのだが、ユイの身体を堪能して以降、レイもヒヨリもあの肉感が恋しくなったのか、ユイに頼み込み自分たちに回復魔法の作用を依頼、それにより加速された消化能力と吸収効率により、今では立派なおデブボディへと変化しているというのだ。

「さて、よっこいしょ…うっぷ…そろそろ行こうか！」
「ふぅ…！そうだねレイさん！次は私の方がたくさん倒すぞ～！」
前屈みになり立つ予備動作に入るレイだがその動きは常人の数倍遅く前傾したことで前方へと垂れた肉ははち切れんばかりに詰められた衣服の中で踊る。一方のヒヨリは脚力を損なっていない為かジャンプして立ち上がる。だがその跳躍時間はあまりに短く、ドスっとも聞こえるような音で地に足を着くと上下に揺れる腹肉とまるでバランスボール大の大きなヒップを暴れさせ、弛んだ二の腕などお構いなしに肩を慣れさせるために上を回す。その様子はまるでダイエット

に燃えるジム通いのトレーナーのようであったが当人たちに減量の意図はなく、こうしてソルの塔に挑むのも頂上に登りたいという目的もあったが寧ろ魔物から手に入る戦利品を売り、ランドソル有数の肥満ギルドとして食費に充てる為という意識のほうが大きいだろう。そして…。

「どうしたの、ユイちゃん？」

「何かあったのかな？」

「ごめん二人とも…立てないから、手、貸してほしいな…！」

それならお安い御用とレイとヒヨリは手を伸ばしては握られた温かい手を強く握り返す。いくら食べても皮下脂肪が地層のような暑さに成長した為に張る事のない腹肉を懸命に揺らし座り込んだ場所には汗の池を生成し漸く立ち上がったユイの背中には一人の騎士の支えが添えられていた。いくら巨体になろうとも、贅肉が身に付こうとも少女たちの挑戦は続く、いつか願いを叶えるその日まで。

完

2020/09/27 ジール（ZeaL）

※本作品の二次配布及び無断転載を禁じます。

※本作は原作の設定をリスペクトして作られていますが原作に対しては一切関係のないストーリーです。

※本作は私の描いた次の二次創作イラストを基にストーリーを練り直したショートストーリーになります。参考としてご覧の上もう一度お読みいただけるとより楽しめると思います。

※本作を楽しんでいただけましたら是非、プリコネR を実際にプレイすることを強く推奨します。

ユイ
Height：158cm
Weight：61kg
ど、どうしよう…食べる手が、はぐっんぐぅ…
あぅむ、止まらないよ！
これ以上食べたら皆に太ったってバレちゃう…
でも、食べたい！あむっ！

ユイ
Height：158cm
Weight：324kg
ふう…ぜぇ、んぐぅ…
チェンジ・プリンセスフォーム！
ってなんで⁉
このままじゃ…き、騎士クン⁉
だ、ダメだよお腹揉まないで…！
でも、ちょっと気持ちいい…